

【学校向け・地域向け】【協力・実践形態：長期】単発【本会ホームページへの掲載：あり・なし】

学民ジョイントプロジェクト(学民協働プログラムの研究&開発)

「本物を知る、現実に触れる、未来に向け学ぶ」

～共に生きる社会の一員として自分のできること～

【推進員認定期】 第1期～5期

【所属】 **あたらかウェルねっと** 【活動エリア】 埼玉県内 各市町村

学習対象者	小学生（ 年生 ） 中学生 高校生 住民 その他（ ）
内 容	<input type="checkbox"/> 障がい理解（車いす体験、アイマスク体験、当事者と交流、施設体験、その他（ ）） 高齢者理解（高齢者疑似体験、 当事者と交流 、施設体験、その他（ ）） その他の理解（ ）
所用時間	単元時間：32時間 4か月、 1回あたりの時数：2時間
ねらい	学校：現実・本物に学び、未来の社会人として、生徒たちの「生きる力」を丁寧に育成する。 民間/ねっと：「共に学びあう」福祉体験や交流を通して、学ぶことや出会いの楽しさを伝え、 「共に生きる」地域の福祉課題をみんなで解決できるよう、「あたらかい心」を育てる。 県教委：民間と学校のノウハウを絡ませて、学校の授業を質の高いものにする。

はじめに

平成 17・18 年度埼玉県教育委員会の企画で、新たな学習プログラムを開発する「学校と民間との協働プラン開発事業」を公立小中学校 10 校が、民間 10 団体と協働して、総合的な学習の時間の 5 テーマ（福祉・ボランティア教育、国際理解、環境教育、キャリア教育）が実施された。あたらかウェルねっとは民間団体として応募し、中学校と協働し、総合的な学習の時間「福祉・ボランティア学習」プログラムを研究・実践した。主眼は「心の耕し」で、最後まで生徒たちの心の成長を確認しながら「学・民」で展開させた。

実践内容

全体を「起承転結」の 4 つに分け、1 つのコマが終わるごとに生徒の「気づき」や「関心を持ったこと」など記録を綴らせ、自己分析を繰り返し生徒自身の変化（成長）の気づきを積み重ねた。（ポートフォリオ）

- 【起】：学習内容を「課題」として意識していない段階・・・本物に出会い現実を知る。導入・体験・交流（5 回）
- 【承】：自己をふりかえり「課題発見・課題設定」・・・自主グループを編成、自分ができていることを考える（3 回）
- 【転】：主体的に自らの自由な発想で「課題追求」・・・共に生きる社会の一員として自分ができていること（4 回）
- 【結】：学習内容を自らの課題と意識した「課題解決への提言」・・・社会に役立つことをまとめ、発表（4 回）

ここがポイント！

【起】：導入 障害って何？福祉って？ボランティアって？このような素朴な疑問に答える全体学習で、福祉とは特別なものではなく、ふだんのくらしのしあわせだということを、生徒に分かり易く伝える。

講話 クラス毎に、障害者本人から「強い意志と目的」を持つと「ふつう」に生活できる現実を伝える。

大規模体験 学校をまちに置き換え、まちで生活している様々な障害者たちと出会い、交流・体験する。

推進員・PTA・地域の方が一緒に生徒たちの体験が「あたたかくふれあう力」になるよう協力し合う。

【承】：自分の住んでいる地域に関心を持ち、こんな町だといいなと考え、生徒自身が福祉課題を決める。

【転】：課題別小グループ学習。学校だけでなく地域や家庭の協力が必要。自らの自由な発想で地域に目を向け、生徒たちの創意工夫による学習にする。仲間と協力し合い、生徒が主役の授業にする。

【結】：グループ 学年 学校 個人の学習へと進んでいく。学校・地域、みんなで学習を共有化する。個では、生徒たちが今回の学習で自分が「共に生きる社会の一員」であり、「ふだんのくらしのしあわせ」につながっていることに気づき、未来の社会人としての行動化に結びつける。

成果と課題！

成果

生徒たちが大規模体験学習で「世の中にはいろいろな人がいる」ことに気づき、自分自身を振り返り、自分と違う個性を持っている人とも付き合っていこうと思いはじめました。また障害者の日常生活を知ることによって、自分の住んでいる地域がはたして障害者や高齢者が住みやすい町なのかと興味を持ちました。そして「障害」という言葉をマイナスに捉えずに自分たちの少しの手助けで、障害者も他の人と同じように生活を楽しんでいることを知りました。きっかけさえあれば、子供たちは自ら学ぶ意欲を持ち、成長することを示してくれました。また生徒たちをやる気にさせたのは、先生と生徒が同じ土俵にいたことです。あったかウェルねっとも先生と生徒と一緒に「あたたかくふれあう力」の「新しい学習の展開」を生み出すことができ、今後の福祉教育推進活動への新しい一歩になりました。

課題

総合的な学習で得た「子供たちの学び」は教科や普段の生活に生かすためです。学校現場では、特に中学校では教科ごとに先生も変わるので、各教科間の連携も難しいとは思いますが、総合的な学習の体験による「生徒自らの気づきや興味、関心」を「教科」の中でどのように生かすか、どう繋げていくかは課題となりました。福祉教育は子どもから大人までの学習です。「誰もが住みよいまちづくり」には、これまで以上に、『共に生きる』地域の福祉力に気づきあい、それが立場を超えて「協働」「実践」していくことが不可欠です。これからも、大人も生徒（子ども）と一緒に学ぶ視点が必要だと実感しました。